風景デザインレター from 九州(第27号)

「風景」にまつわる話で大事なものを忘れていました。陶器でいうところの「けしき」、そう、やきものの風景のことです。といっても、その手の話には、詳しい人がたくさんいらっしゃる中で、感性だけで話をします。ご勘弁を。今日も、酒飲みのたわごとのような話ですみません……

村山武の「やきものの風景」を読みつつ、唐津で一杯やりながら

【デザインされたコップ vs 唐津焼】

最近は、めっきり弱くなってしまったお酒の話で恐縮です。若いころと違って、酔うためのお酒はとうに卒業し、今は、味わうお酒となっていますが、そこで大切なのが酒器。まあ、凝りだしたらきりがないでしょうが、出張の傍らにその地の焼物などを買いあさるのは、私の師匠久保田顧問に鍛えられたからでしょうか。まあ最初は、土産屋に並んでいる面白いものを買い始め、ほとんど使わないまま仕舞い込まれることが続きましたが、ある時期から、いっちょ物としての自分の酒器を求めることができるようになりました(というつもりになっているということですが)。以前に、目利きになることの話を書いたことがありましたが、本当にどうでもいいものは全く使わないものです。使っているのは、やはり、少し気張って買い求めたもので、唐津の土っぽいおちょこであったり、有田の蕎麦猪口であったりと決まってきます。

さて、この本で紹介されている著名人（立原立秋などの歴史的な人を含んで）たちが、どのように焼物をみているか。

面白いのは、それぞれ芸術品として見ている人はいなくて、茶碗であれば、料理を盛りつけたり、お酒をくべたりと日常的に使い、また、火器であれば、当然、花を活けるのに使う。共通しているのは、器だけの世界ではなく、そこに盛りつけるもの、盛り込むものと一体となって現れる世界を愉しみ、それを評価しているということでした。しかし、料理を盛り付けた器というものは、料理が主で器が従という関係ではなく、そのバランスが保立てれていること、自己主張をしすぎないことが、愉しみを与えてくれる条件のようです。絵画のような場合は、その絵画のある空間は、絵画のために存在する場合がほとんどで、絵画が主で空間(部屋)が従のような関係があると思うのですが、この焼物やガラス器の場合は、何かの目的に供され、かつ、関係性が問われ、かつ、作品としての芸術性を表出しているものであるということです。これは、洗練されたデザインのコップというものとまた全く異なり、このデザイン性は、あくまで機能美です。

そういえば、前回の「コボちゃん」の漫画の服のデザインと抽象画の画材との違いが消化不良のまま終わってしまったのはここにその理由があるような気がします。デザインと芸術の違い、そして、デザインされた器には風景は宿らないが、芸術品とでもいう器にはきちんと景色が現れる。一つには、器にあらわれる景色は、同じものが現れない固有性をもったものであること、いかに素晴らしいデザインであっても、大量生産のなかに乗る場合は、一つ一つの固有性は生じないことがあるのかもしれません。

物と物でないもの。芸術の一つである音楽は、同じ CD であれば固有性はありませんが、そこから受けるのはデザインから受けるものとは違う、なにか固有のもののような気がします。「音楽」と「景色を持った器」の共通点とは何か。バカラのグラスは、どっちなのか。そう、音楽で比較するのには、チャイム、あるいは携帯の呼び出し音のようなものはどうでしょう。チャイムにもいろいろのパターンがありますが、いかに洗練されたチャイムでも、それに気持ちが入る込むことはないでしょう。単純なものとそうでない複雑なものの違いなのか。いつか、2次製品の護岸には良さを感じないが、石組の護岸には美しさを感じるということを書きましたが、そう、手が込みいっていることと、そして単に手が込んでいるだけでなく、そこにある意志を感じるとることができるときに美しさを感じるということを書いたような気がします。

美しいと感じる心もいろいろの段階が当然あって、デザインされたコップに対するうつくしを感じる場合と、唐津焼のような器に感じる美しさは、その美しさを感じるレベルが違っていて、同じようなことを当てはめると、美しい風景にも、山や川との一体的な風景と、デザインされた街路に対する美しさというものは、美しさという言葉は同じでも、美しいという言葉のレベルが違うということではないでしょうか。・・機能美の美しさは、レベルが低い？　え？、そうなのか？？【続く】